0.001), EFは有意に低下した(−4.6±7.4 vs. 11.1±7.3%, p<0.001). EDVは同等の変化を示した(110±7 vs. 107±7%, p=ns) HCMにおいてVESTを用いることで，より詳細な心機能変化を捉えることが可能であった.

17. 肺扁平上皮癌におけるタリウム所見の検討 ——炎症所見を中心に——

仙田 宏平　大島 治泰　斉藤 正人
鈴木 祥夫　佐久間隆廣
(国立名古屋病院・放)

確定診断した肺扁平上皮癌36症例のタリウム肺腫瘍シンチについて腫瘍病巣とその近傍肺野集積の程度を判定し，扁平上皮癌での特徴を検討した．検査は，回転型ガンマカメラ(GE, Starcam 3000)を用い，^{201}Tl-chloride約111 MBq静注後15分に早期planar像を，3時間に晩期planarおよびSPECT像を撮像した．両Planar像の腫瘍と腫瘍近傍異常集積の程度をスコア化し，胸部X線CT像等を参考にして得た腫瘍の性状ならびに腫瘍近傍の炎症所見等と比較検討した．腫瘍近傍または末梢炎症所見(+)24例のスコアは，炎症(−)12例との間で，早期像の近傍集積，早期像の腫瘍／近傍集積差，晩期像の近傍集積について大きな差を示した．したがって，扁平上皮癌の腫瘍集積を評価する上で炎症への集積に注意を要する.

18. ^{99m}Tc-GSA肝シンチグラフィを施行した胆道閉鎖症の1例

遠山 淳子　加藤 徹　岡野 美穂
三毛 壮夫　三村三喜男
(名古屋第二赤十字病院・放)
黒堅 賢仁　大場 覚　(名古屋市大・放)

肝細胞表面に特異的に存在するアシアロ糖蛋白受容体に親和性を有する^{99m}Tc-GSA肝シンチグラフィを胆道閉鎖症例に施行した.

症例は男児．生後4週より黄疸増強．肝脾腫を指摘された．日齢63日時に肝門部空腸吻合術施行．胆道閉鎖症と診断された.

術前の^{99m}Tc-GSA肝シンチでは肝腫大を示し，SPECTでは，限局性の低集積域を認めた．肝機能の指標であるHH_{15}は0.52, LHL_{15}は0.98と成人の正常値に一致し，小児の場合にも，成人の正常値を適応できるものと考えられた．体重5.5 kgの本例に74 MBq投与したが，乳児では肝臓の体重に対する割合が大きく投与量は適当と思われた．^{99m}Tc-GSA肝シンチは胆道シンチと併用することにより，胆道閉鎖症と，重症乳児肝炎の鑑別に有用となると思われる.

19. ^{99m}Tc-PMT dynamic SPECTによる肝クリアランスの測定

秀毛 範至　油野 民雄　中嶋 憲一
横山 邦彦　孫 保福　宮内 勉
利波 紀久　久田 欣一　(金沢大・核)

三検出器型SPECTを用いた^{99m}Tc-PMT dynamic SPECTから肝クリアランスを算出する方法について，rotation time, 入力関心領域のcut off level, curve fittingの区間が算出クリアランス値に及ぼす影響を検討した．rotation timeは，30秒と1分で，算出クリアランス値は差を示さず，PMTの肝摂取率のT 1/2の約半分である1分が適当であると考えられた．cut off level 40〜70%では，算出値は安定しており変動は10%以下であった．curve fittingの区間で，最初の数点を省いてクリアランス値を比較したが，変動は10%以下であった．本法で得られた総肝クリアランス値とヘパプラスチンテストの結果は，有意な相関を示し(r=0.82, p<0.02)，本法は局所肝機能分布の評価に有用と考えられた.

20. 動注化学療法中の転移性肝癌症例に対する核医学検査

西川 聡　高橋 範雄　杉本 勝也
坂井 豊彦　木本 達哉　林 信成
山本 和高　石井 靖　(福井医大・放)

直腸癌肝転移に対してTAE, 5-FU持続動注療法を施行し，bilomaおよび，局所肝実質障害を合併した一例を経験した.

本症例ではCTで新たな低吸収域が出現し，肝・胆道シンチグラムにおいてそれらに一致したRIの貯留を認めbilomaと診断できた.

^{99m}Tc-MAA動注シンチグラムを3回施行し，動注さ

Presented by Medical*Online